
勇者様御一行と珍道中

蒼玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者様御一行と珍道中

【Nコード】

N7101U

【作者名】

蒼玉

【あらすじ】

新しく黒鉄の鍛聖が誕生してから数か月後。遠い街から勇者様がお忍びでワイスタアンにやってくる。なんで黒鉄の鍛聖様と個人的に仲がいいようで・・・？勇者様が観光するのはいいけれど、それだけで終わらずに、なにやら世界存続の危機にまたもや首を突っ込む羽目になるのだった。

01：再開（前書き）

登場人物

クリユウ：新しい黒鉄の鍛聖。まだまだ駆け出しの少年。

ザンティック：クリユウのパートナー。ミサイルの形をしたロボット。

ナツミ：異世界から召喚された少女。勇者様。

クラレット：ナツミを召喚した少女。ナツミのパートナー。

01：再開

潮の匂いが鼻につく鉄で固められた島であるワイスタアン。

その街中を銀髪の少年と小さなミサイル型の機械兵士が駆け抜けていった。

まだ幼さの残る顔には不釣り合いな大きな剣を背負っているが、すれ違う人々は違和感もなく受け入れている。むしろ親しげに話しかけている者ばかりで、その少年の人気を伺わせた。

「わっ、もうこんな時間だ！ ナツミさん、待たせちゃったかな？」

「、、！」

「そうだねっ。急ごう、ザンティック！」

二人（？）はそう声をかけあうと更に足に力を込めた。

それから少し前に遡る。

その時間帯に一隻の船がワイスタアンの港に入ってきた。この町は武器を生産する所なので今回のように観光客を乗せた入港は珍しい。特に女性二人が連れだつての旅は滅多になかった。

「ん〜。潮のいい香り〜」

短めに切られた髪をなびかせながら一人の女が船から降りる。その

あとに長い髪の女が続いた。

むせかえるような潮の匂いに波の打ち寄せる音はいつもと違う非日常を物語っている。

何かが始まりそうなの、そんなうきうきした気持ちが自然と湧き上がってきた。

「ナツミ、船酔いはもう平気なの？」

「うん。心配かけたね、クラレット。もうぜんぜん元気！」
「それは良かった」

長い髪を風になびかせてクラレットはにっこりと微笑む。

そんな彼女に元気よく返事を返して、短髪の女性「ナツミはぐっと伸びをした。」

「ねえクラレット。ここがワイスタンっていうところだよな？」

「ええ、そう。武器を作る鉄骨の街。騎士の変わりに鍛聖と呼ばれる7人の代表が政をしているところ。・・・ナツミ、そんなに身を乗り出していると落ちるわよ？」

「無問題、無問題？。心配しすぎだって」

ひらひらと手を降りながら、ナツミは足元にある海水を見つめる。

ワイスタンの港に着いてから暫くたつが待ち人は未だに現れない。少し手持ちぶさたになってきたのだ。

その様子に、仕方がないというように肩をすくめたクラレットは改めて声をかける。

「それでナツミが会う予定の子について教えてほしいのだけど」

「うん。って、あれ？クラレットになーんにも言っていなかったっけか」

「ええ。全く」

「あらま」

びっくりしているナツミに対してクラレットは苦笑いをして見せた。

「ゴメン、ゴメン。えっとね、ずいぶん前にあたし、召喚師をつれて帰ったことがあつたじゃない」

「ありましたね。本当にあの時は心配して生きた心地もしませんでした」

「まあまあ。それでさ、そいつを捕まえる時に助けてくれたのがその子つてわけ。色々あつたけど最後は仲良くなつて、今度遊びに来るときにはワイスタアンの街を案内してくれるって約束したの」

「それで連絡先を教えて、1カ月に一回ぐらいの割合でポストを覗いていたんですね」

「そういうことつ。そんで今回遊びに行きますよーって手紙を送ったら港まで迎えに来てくれるって連絡がきたんだけど」

そこで言葉を区切ってもう一度辺りを見回す。クラレットもつられたように辺りを見回すがそれらしき人はいない。というか、港にいる人間はナツミとクラレット以外に誰もいなかった。

「いませんけど」

「うーん、ほんとにねえ。どーしちゃったんだか」

「騙されたとかはないですよね？」

「あつたりまえじゃん！あたし、それでも人を見る目はあるほうなんだからねっ」

「まあ、そうですね・・・」

段々イラついてきたナツミと困った顔のクラレットが顔を見合わせていると、一人の少年が港に駆け込んできた。傍らにはロケットのような形をした小型のロボットが一台浮かんでいる。

よほど慌てているのか息が荒い。吹き出る汗を拭くこともせずキョロキョロと辺りを見回しはじめた。

「来たみたいですよ？」

「あ、ほんとだ。おい、こっち、こっち！」

ナツミが声をかけると、バツとその方向に顔を向ける。目が零れ落ちそうなほど大きく見開いてからダッシュで二人のもとへ駆けていく。

そして二人の目の前で勢いよく頭を下げ、大声を発した。

「遅れてごめんなさい！！！」

「、、、！！！」

その潔さにナツミとクラレットはもう一度顔を見合わせる。本人も十分に反省しているようではあるし、正直、先ほどの慌てぶりにイライラしていた気持ちもなくなっていることに気が付いた。ここまで反省しているなら、まあいいかという気がしてきたのだ。

「ま、今日のところは許してあげるわ」

「ホント、ですか・・・？」

「まあね」

「っ、ありがとうございます！！！」

「ただし」

「？」

「次やったら、タダじゃおかないから」

「・・・はいいい」

「っ！！！」

n
e
x
t

02：自己紹介（前書き）

登場人物

クリユウ：新しい黒鉄の鍛聖。まだまだ駆け出しの少年。

ザンティック：クリユウのパートナー。ミサイルの形をしたロボット。

ナツミ：異世界から召喚された少女。勇者様。

クラレット：ナツミを召喚した少女。ナツミのパートナー。

02：自己紹介

クリユウがナツミたちと再会を果たしてから、3人と1台は落ち着ける場所を求めて街中の噴水のある広場へとやってきていた。すれ違う人々はクリユウとザンティックに必ず声をかけていく。銀髪の少年はかなりの有名人のようだった。

「これ、お水です。少し甘くしてあるんで美味しいですよ」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

噴水の水がぱしゃぱしゃと音をたてている。一つのベンチに3人は腰かけ、ザンティックはクリユウの膝の上。大きな剣はベンチの横に立て掛けてある。

ナツミたちに手渡された水は、よく冷えていて日差しに当たっていた体に気持ちいい。一気に飲み干すナツミと一口ずつ水を飲むクラレットの様子に、クリユウはへにやりと笑顔を見せた。

そうして全員が一息つきナツミは改めてクリユウとザンティックに向き直った。それを見て、クラレットもいずまいを直す。

「じゃあ改めて自己紹介をするね。あたしはナツミ。サイジエントから来たの。クラレットはあたしの一番の友達。趣味は釣りで好物はラーメン。バレーボールが得意かな？よろしくね！」

「はいっ！」

「」

「それでは次は私ね。私はクラレットよ。召喚師でナツミのパートナーです。そうね・・・趣味は読書かしら。物静かな方だと思っわ」「し、召喚師様なんですか!？」

「ええ。でも堅くならなくてもいいのよ」

「っ分かりました！」

にっこりと笑うクラレットにクリユウは照れたように笑う。その幼い表情にクラレットはふふつと今度は声を出して笑った。

「なーんか、あたしと態度が違う気がするんだけど？」

「き、気のせいだよ！」

じと目でクリユウを見るナツミに、クリユウは慌ててかぶりを降る。

「まあ、いいけど。次は君の番だよ」

「はいっ！僕はクリユウっていいます。こっちは友達のザンティック。僕らは鍛冶師で主に武器を作っています。趣味は・・・なんだろう？武器作り？かな。好きな物はカレーで、早く立派な鍛聖様になりたいなって思ってます」

「、、、！」

「えっと、ザンティックもよろしくって言ってます」

クリユウはそう言つとぺこりと頭を下げる。ザンティックはキラーン！と決めポーズをとった。

「おおー」

ザンティックの決めポーズにナツミは思わず拍手を送る。クラレットはクリユウのお辞儀につられて一緒に頭を下げた。

「で、これからどうしよつか」

「二人とも疲れてないですか？」

「ええ。私は平気よ」

「あたしも全然元気！ね、ちょっとお腹空かない？」

「そういえばそろそろお昼だわ」

ナツミがお腹をさすりながら言えば、クラレットが頭上の太陽を見上げて同意する。

二人に言われてみれば確かにクリユウ自身もお腹が空いていることに気がつく。

「じゃあお昼にしましょう!」

「!」

「そうですね」

「賛成!」

こうしてクリユウたちは街を見る前にお昼をとることにしたのだ。た。

n e x t

03：お店は閉まっているけれど（前書き）

登場人物

クリユウ：新しい黒鉄の鍛聖。まだまだ駆け出しの少年。

ザンティック：クリユウのパートナー。ミサイルの形をしたロボット。

ナツミ：異世界から召喚された少女。勇者様。

クラレット：ナツミを召喚した少女。ナツミのパートナー。

店長さん：カレー屋さん。スパイスやナンも売っている黒い肌の男の人。

03：お店は閉まっているけれど

太陽も一番高い場所で照りつけている時間帯。そんな暑い中、とあるお店の前で立ち尽くしている三人と一機の姿があった。扉は固く閉ざされ、中に人のいる気配は無い。誰がどう見てもお店が開店していないことが一目で分かる佇まいだった。

「ちょっと！開いてないじゃん」

「これはどう見ても閉まっていますね・・・」

ナツミとクラレットの口から同時に言葉が出てくる。その様子に、クリユウは気にすることなく二人の言葉に返事を返した。

「だって定休日だから、当たり前じゃないですか」

「」

「なんで！カレー食べにこの店に来たんじゃないの!？」

「違いますよ？」

くっつかかるナツミにクリユウはビックリして答える。

その言葉を聞いて女二人は驚いた表情を見せた。

「じゃあ、カレーは食べれないわけっ」

「そうなんですか？」

「へっ？それも違いますよ？」

「じゃあなんなのさー!」

クリユウの受け答えに訳も分からなくなりそうでナツミが大声を上げる。

その剣幕に引きそうになりながらもクリユウは恐る恐る声を出した。

「ここでスパイスを頼んであるんです。それを受け取って、僕の家でカレーを作る予定だったんですけど・・・」

「って、そういうことなら早く言いなさいよね。回りくどくて、訳分かんなかったよ」

「私もそうしてほしかったです」

「あつと、ごめんなさい」

「まあいいわ。早いところ、そのスパイスを買ってカレーを食べるわよ」

「そうですね」

「了解です」

「、、」

何やら背後をメラメラとさせながらナツミが力強く宣言する。それにクラレットが頷き、クリユウもつられたように気合いの入った返事を返した。

因みにザンティックはウキウキとしながら、「カレー、カレー」とリズムをとりながら言っているらしい。最も、彼の言葉はクリユウしか分からないのでその真偽のほどは謎に包まれていたりするのだが。

まあ、それはさておき、クリユウは固く閉ざされている扉をコンコンと軽く叩きながらドアを開ける。

意外と呆気なく（ナツミ視点）開いた扉の向こう側には、白い布を頭に巻いた色黒の男の人がニコニコしながら待っていた。その人は、白い包みを幾つかと平べったい白いパンの入った編みかごを手にクリユウに近づく。

「なんだかナツミとはまた少し違った人ですね」

「まあね。住んでた国が違うから。・・・うーん、想像したとおり、本場の人だあ」

「と、言うのはどういうことなんです？」

「アタシのいた世界でもカレーはよく食べてただけど、それって元々あの人たちの国で食べられてたんだよね」

クリユウの後ろから付いてきたナツミとクラレットはキョロキョロしながら小声で話す。

そんな二人を背中であいさすしながらクリユウは挨拶を交わして、そのかごを受け取った。

「クリユウさん、ごチュウモンのスパイスセットですヨ」

「わっ。ありがとうございますっ。お店が休みなのに無理を言っすいません」

「こちらこそ、アリガトーゴサイマス。沢山、シヨウカイしてくれて、ウレシーです」

「なになに、クリユウってば常連さんなの？」

お店の人が客商売を抜きにしてもかなり親切なことに気がついて、ナツミが話に入ってくる。クリユウはちょっとはにかみつっ、お店の人はニコニコと嬉しそうに頷いた。

「そうですヨ。お礼にナン、焼きました。一緒にドウゾ」

「いいんですか！？ありがとうございますっ。僕、このナン、大好きなんです」

「！」

「それはウレシーね。鍛聖サマに褒められる、いい宣伝にナルヨ」

「えへへ」

「わあっ！ホントに本場のカンジだ！・・・って、え？」

「あの、クリユウってあの鍛聖様、なんですか・・・？」

「えっと、一応そうです。っていつても見習いみたいなもんですけど」

「、」

クリユウは嬉しそうにお店の人にお礼を言う。
ナツミもクラレットは初めて知ったクリユウの肩書に驚きつつも、
店長さんの心遣いに心を込めてお礼を言うのだった。

n e x t

04：おもてなしの準備の準備（前書き）

登場人物

クリユウ：新しい黒鉄の鍛聖。まだまだ駆け出しの少年。

ザンティック：クリユウのパートナー。ミサイルの形をしたロボット。

ナツミ：異世界から召喚された少女。勇者様。

クラレット：ナツミを召喚した少女。ナツミのパートナー。

ラジィ：黄色い服を着た色黒の子供。

04：おもてなしの準備の準備

クリユウ、ナツミ、クラレットの三人の昼食予定であるカレーの材料を持った一行は、軽い雑談をしながらクリユウに案内されて銀の匠合に向かっていた。

道々、どんなところからもよく見える、この都市のシンボルである中央工房の近くを通る。

そして、そこを通りすぎれば次に見えるのは銀の匠合だ。

それは丸い屋根が特徴的なもので、何本もの煙突から煙がもくもくと噴き出している。

その様子を珍しそうな表情の女二人と近づいていくとなにやら中が騒がしい。

不思議そうに互いの顔を見回す3人と一機。

するとものすごい勢いで何か飛び出してきた。それは黄色い塊で、あっという間にクリユウと思いつきりぶつかる。

「わ、あ！とつとつとおう？」

「わあつっつ！」

「！？」

そのために吹っ飛ばされそうになった何かをクリユウは反射的に受け止める。そして思いつきり尻餅をつき、その衝撃に目をつぶった。

しばらくしてから腕の中の人物が身動きしたことで我に返り、今まで持っていた荷物のことが頭によぎる。

まずいと思って辺りを見回せば、ぶつかって宙に飛んでいった材料はザンティックが見事にキャッチしているのが目に入った。

「だ、大丈夫ですか？すっごいいい音してたけど」

「クリユウもザンティックもナイスキャッチじゃん！」

ほーっと一息ついたクリユウにクラレットとナツミが交互に話しかける。

クリユウはそれに笑顔を返し、ザンティックに材料のことのお礼を言ってから立ち上がった。自然、ぶつかった本人も一緒に。びっくりしたのか、未だにパチパチと目をしばたいている。

黄色いバンダナに黄色い洋服。まだ体は小さく、髪も肌も真っ黒な子供だった。

「ラジィ、ちゃんと前を見ないと危ないだろっ！」

「うっ。ごめんなさーい、アニキ」

「まあいいけど。それより、なんでラジィがここにいるんだよ？会場設定のはずだろ」

「それがさ。サナレがなんか張り切っちゃって、訳分かんない料理をやりはじめちゃって。今、食堂がとんでもないことになってるんだよ！」

「ええっ！サナレに料理！？まずいよ、それは」

クリユウはラジィの言葉に真っ青になる。ラジィも焦っているようで、クリユウの服をぎゅっと握りしめた。

「ねえ、二人とも、何をそんなに慌ててんの？たかだか失敗料理でしょ」

「ナツミさん、そういう問題じゃないんだって！」

「！」

「どっという意味なんですか？」

「だって、この前サナレが作った料理、僕たちに襲いかかってきたんだよ！？妙にギトギトしてるし、厄介なほど凶暴だし！」

「そうそう、アニキの言う通り。あれはヤバイよ！」

「・・・料理なのに」

「襲いかかってくる・・・？」

クリユウの口から飛び出した言葉に、ナツミとクラレットはきょとんとした顔をして顔を見合わせる。

いくらなんでもそれはないだろうと思うのだが、クリユウとザンテイックとラジイは本気だった。

さらにはこれから行く予定の銀の匠合の中からは妙にヤバそうな音がしている。

バタバタと走り回る音、怒鳴り声、何かと何かがぶつかりあう甲高い音。それに混じってグルグルと不気味な唸り声。一際大きな破壊音まで聞こえ始め、ナツミとクラレットはごくりと唾を飲み込んだ。

「マジなわけね」

「本当、みたいだわ」

「本当に、本当に、大変だ〜！」

「アニキ〜！」

「、、、」

銀の匠合の前に4人と一機の心底困った顔が並ぶ。

これではナツミとクラレットの歓迎会はいつになったら出来るのだろうか、クリユウとザンテイックは肩を落とすのだった。

next

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7101u/>

勇者様御一行と珍道中

2011年10月10日10時41分発行